
とある警官の学園都市訪問

ハムカッタ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある警官の学園都市訪問

【Nコード】

N3790R

【作者名】

ハムカッタ

【あらすじ】

学園都市をその日、災厄が襲った。それは、日本警察史上最大の問題時とされるとある警官と怒れるその上司、怒れる騙された超能力者によって引き起こされた。

はじめに

私は、一応小説を他にも書いていますが、短編と連載しているとはいえ短編形式ですので、これが実質初の長期連載になるので、うまくかけていないかもしれません。

これは、こち亀とある魔術の禁書目録のクロスで両津が学園都市で騒動を引き起こすというものです。

どういった騒動を引き起こすかのヒントは、オリンピックと金です。ここまでいえば分かりますよね？当然といえば当然ですが、こち亀を読んだことのない人でも分かるように書きます。

第1話 発端（前書き）

更新が遅れてすいません。一話目を投稿します。

第1話 発端

葛飾区内の亀有公園前には、全国で派出所が廃止されてゆくなかもう風景の一部と化しているといつていい派出所がある。しかし、この派出所は廃止されていないという以外にも特殊さを持っていた。主に勤務している人間の個性によって。

そんな派出所の中で、一目で趣味と思われる内容の本が大量に置かれた机の前で制服をだらしなく着こなし、サンダルを夏場でもないのに履いている警官が新聞を珍しく読んでいる。

彼の名は、言わずと知れたこち亀の主人公の両津勘吉。単なる不良警官ではなくもはや人間なのかと疑われるほどの生命力を持ち、金にがめつく経済事件といったものを事実引き起こしているという破天荒の人物だ。

「おい、中川、令子。ちょっと聞きたいんだが。」

「何ですか、先輩。」

「どうしたの両ちゃん。」

その問いに黄色とピンクという正規の制服から外れた整った顔立ちの警官と婦警が答える。警官の名は中川圭一、婦警の名は秋本麗子といい、それぞれ中川コンツェルツン、父の経営する秋本貿易、母の経営するマリイ・ローランという一大企業の子息と子女だ。

そんな人間が何故警察に勤めるようになったのかは、本人にしか分からないだろう。

「この新聞で学園都市内で爆発事故！！テロの疑いも？という記事

があるんだが、学園都市って何なんだ？」

「せ、先輩知らないんですか！」

「ほんとなの、両ちゃん。」

二人の口からそれぞれ驚きの声が上がった。両津は、一般教養には疎いが自分の興味のある知識には専門家顔負けの知識や技術を持っていて、彼好みだというのに知らないのに驚いたのだ。ましてそれが大々的にしれわたっているというのだ。

これは、普段新聞を読まないために来たものだ。

「ああ、知らん。お前らの態度を見ると有名なのか？」

「有名どころじゃありませんよ、先輩。出来てから大分たっていますが、学園都市といっても規模が桁違いで東京、埼玉、神奈川、山梨の4都道府県にまたがっている都市です。学生の数も数百万人という単位ですし、中川グループも含めて科学技術に対する格差が学園都市とかなり生じています。僕も何度か学園都市で行われた会議に参加したんですが、かなり政治的影響力が高いので学園都市製の技術は一部給与という形でしか得られませんでした。」

「ほう、それは凄いな。」

両津が感心して頷く。中川コンツェルツンの政治的影響力と資産額の凄さは、悪用したり同僚だったり一応親戚だったりするので凄まじいという一言では表せないということを周知していた。その中川コンツェルツンでさえも技術を得られない上にそれなりに高い技術力を有する中川コンツェルツンが欲するほどなのだ。感心する以外にないだろう。

ここまでは、何も起こす気は両津にもなかった。

だが、「それだじゃなくて超能力も開発しているのよ。」という麗子の発言がとんでもない事態を引き起こしてしまう。

「ちよつ、超能力だと！日暮みたいなやつがいるのか！？」

両津には、4年に一度しか起きないとはいえ知り合いに超能力者がいるためその凄さを熟知していた。

「違うわよ、両ちゃん。日暮さんは自然にいつしか目覚めちゃったか、でなかったら先天的に資質があつたみたいだけどそれとは違うわ。学園都市では、確か薬物などを元に人為的に行っているはずよ。」

「薬物だと！危なくないのか？」

「先輩がイメージしているものと違って危なくはないです。薬物といっても麻薬などと違いますし、あくまで薬物も人為的に超能力を持たせるために行う処置の一つでしかありません。具体的な開発手順は不明ですが、量子力学という学問でいうシミュレーションガ―の猫を利用したものです。」

「日暮さんみたいな人は、原石といって貴重なのよ。」

その問いに中川と麗子がそれぞれ答える。

その時もすでに両津は説明の1つしか注意を払っておらず脳内の損得計算機が活発に働いていた。すなわち超能力研究を行っている学園都市に日暮を紹介すれば金になるのではないかと。

「ちよつとパトロールに行ってくる。」

そうと決めたら早速実効に移すために両津は派出所をパトロールと偽って出ていった。中川と麗子もいつもパトロールに気が向くと規則を無視していくためにいつものことかと放っていた。

しかし派出所を両津が出ていってしばらくしてから麗子がはたと
気づく。

両ちゃんが悪い人でないといえ日暮さんみたいな人が貴重といっ
たのは不味かったのではないかと。

第1話 発端（後書き）

両津が学園都市のことを知ってから事件を引き起こさせるために、原作の有る話で普段新聞を読まないという設定があったのでそれを流用しました。

中川と両津が親戚だったり、秋元麗子の父と母がそれぞれ別の会社を営んでいるのは公式設定のようです。

ウィキペディアやジャンプリミックスのこち亀を見て知ったんですが。

第2話 覚醒（前書き）

今回は、いよいよあの男が覚醒します。

ちなみに今回書いているあの男に関する情報は全て公式です。

第2話 覚醒

派出所を出た両津だが、自分の思い付いた金儲けを早速実行した訳ではない。まずは中川と麗子から概要を聞かされた学園都市の具体的な所在や到達手段、活動内容を調べなければいけないしアイツを騙すための準備も行う必要があった。

そして両津は、本来ありえないような速度でインターネットなどを用い学園都市について調べ、準備を終えるとこれまた埃を蹴散らしながらという走りで、目的地へと向かう。

目的地は、ニコニコ寮。新葛飾署の男子寮で、何故かありえない規模のセキユリテイーと城のような豪壮さを誇る女子寮とは比べ物にならない極平均的な建物で両津の部屋もある。

だが、目指すのはそこではない。両津は、ニコニコ寮へと飛び込みと「あつ、両さん。」という寮母の声を無視し、階段へ飛び込みと目的地の4階へと一気にかけ上がる。

この階に目的地があるのだ。目的地の一室が見えてくるとドアを開けるのではなく、体当たりして無理矢理ドアを蹴散らすという過激な方法で室内へと入室した。

その部屋は、人間が生活している痕跡がまるで無かった。家具の1つも存在していない。

だがこの部屋にも住民は存在していた。それ以外にはなににもないが、部屋の中央部には明らかに布団とそれにくるまった人間が寝ていた。一見死んでいるようだが、そうでない証拠にすやすやと寝息を立てたりするところを見ると死んではないのだろう。

ただ昼間から眠っている駄目人間ではない。いや駄目人間かもしれないがそれと同時に優れた常人にはない能力を持っていた。

彼の名は、日暮熟睡男。かつて両津と同じく派出所勤務だったがそ

の後新葛飾署勤務へととなっている。が、現在は4年に一同しか起きないという勤務態勢へとなっている。

元々1日24時間の内16時間は寝ているというグウタラだったが、それが高じて現在は4年に一度しか起きなくなっていた。

そんな彼が首にならずに済んでいるのは、念力や未来予知といった超能力を持ち未来予知を活かして逃亡犯を逮捕できるためだった。そして超能力を持つ彼を学園都市に売り付けるのが両津の金儲けのプランだった。

「おい、起きろ、日暮。」

日暮の体を激しく揺すりながら耳元で起きるよう大声で叫ぶ。こうでもしないと日暮は、起きないだろう。

「あつ、両さん。もう4年たったの？」

さしめの日暮もこの攻めに眠り続ける訳にはいかず起きてしまう。ここが正念場だ。もしうまくごまかせなければ、以前一度起こしたことがあるのだが4年間眠れなかったがために暴れてしまうという事態に発展したことがある。

うまく騙せなければ、金儲けどころか一貫の終りになってしまう。

「もう4年経ってるよ。ほら今日オリンピックがあるって言うてるだろ。」

両津は、日暮を騙すために準備したもののスイッチを決死の覚悟で押す。それは、ラジカセだった。

そのラジカセから今日オリンピックが開催されるといった内容が流れてくる。

無論オリンピックは、開催されていないためこれはラジオではなく

カセットのテープだ。両津が日暮を騙すために用意したのは、今日オリンピックが開催されると編集したカセットだった。

「本当みたいだね。それじゃあ、着替えたら早速署に行かないと。」

「待て、今日は署ではなく学園都市に行くことになっている。」

「学園都市って何だい？」

両津も知らなかったが、日暮は4年に一度しか起きないためキャンデイスの解散や消費税の変更といった世間の変化を知らないため当然知るわけがない。

両津は、中川と麗子から聞かされた話と自分が調べた学園都市についての話を聞かせる。

「つまり、学園都市というところで超能力を調べているからその超能力研究に協力してほしいという要請があつてそこにいくんだね。」

「そういうわけだ。4年前に学園都市から要請があつたんだが、前はそのときすでに寝ていたし下手に起こすわけにはいけないから次起きたら向かわせるよう言われていたんだ。」

両津は、白々しいうそをつく。学園都市からそういった要請はないし学園都市は日暮の存在を認知していないだろう。

だが、これしか学園都市に向かう理由をもっともらしく説明することとは出来ない。

「なんか、変な人体実験とかされそうで怖いな。絶対に行かないと駄目なの？」

「当然だ、これは学園都市と警視庁の交流をかねてなんだからな。それに法治国家の日本で人体実験なんて行えるわけがないし、シス

テムスキャンといったふうに能力を外部から調べる機器が有るので問題ない。行くぞ！」

「仕方がないな。」

こうして日暮は、両津にだまされて学園都市に向かうことになってしまう。

第2話 覚醒（後書き）

次回は、いよいよ両津と日暮が学園都市に乗り込みます。どうやって両津が学園都市内に合法的に乗り込むか楽しみにしてください。疑問があつたら感想でお願いします。

第3話 来訪

「り、両さんここが学園都市。」

「ああ、そうみたいだな。」

日暮を連れ出した両津は、学園都市へと向かうが、着いてみるとその姿は圧巻だった。

正確には学園都市前なのだが、それでも近未来的なデザインの姿のビル群を捉えることはできるし、何より周囲を覆う高さ5メートル、厚さ3メートルの壁が威圧的な雰囲気醸し出している。

これは、学園都市の政治的影響力の一因でもある優れた科学技術を漏らさないためにとられている措置だ。実際には非合法かつ非人道的な人体実験を漏らさないために外部と隔離する要素もあるのだが。

「ねえ、両さん。あの人達銃を持つてるけど本当に大丈夫。」

日暮が言っているのは、学園都市の詰所を管理している人間のことで。詰所の中にもいるが、外にいる人間は明らかに自衛隊とも警察とも違う服装でかつサブマシンガンと思わしきものを肩にかけている。彼らは、アンチスキルという学園都市が自衛戦力として保有を許されている武装した学園都市の何と教員で編成された部門の人間だ。

実質的な半独立国家といえるほどの影響力を持っているからできるのだろう。だが、だからといって臆する両津ではない。

「大丈夫だ、話についてるからな。学園都市の警察部門なんだ、儂が手続きしに行ってくるよ。」

そういつて両津は日暮を残し、アンチスキルの人間へと近づいていく。両津は、実際には日暮を騙すために言っただけでそんな約束は

ない。

いざとなったら無理矢理突破して入ってしまえばこっちのものと物騒なことを考えながらアンチスキルへと近づいていく。

「申し訳ありませんが、ここから先へは通行が禁止されています。もちろんアポイントメントなどがあつたら別ですが。」

両津が近づいてくるのを見たアンチスキルが静止の言葉をかける。そんなことは、両津にとっておかまいなしだ。

「僕は、新葛飾署所属の両津勘吉だ。アポイントメントはないが学園都市に僕とあそこにいる日暮を入れてくれ。」

「そんなことできるわけじゃないでしょう。警官だからといって実力行使が許されないわけでは…」

「あそこにいる日暮は、超能力者であんたらのいう原石だ。学園都市のためになるぜ。それに上に話をするぐらいいだろ。」

両津は声の調子を上げてはいないが、先ほどと違う剣幕で詰め寄る。「はっ、はい分かりました。」

この男には銃など効かないのではないかと思わせるほどの雰囲気を押され、アンチスキルの人間が指示に従ってしまう。服務規定違反になるが、下手をすれば乱暴されそうだった。

それに上に話をつけたふりさえしてしまえば問題ないだろうと考えてもいた。

「おい、適当にすますんじゃないぞ。ちゃんとやれよ。」

「はい。」

偶然だろうが自分の考えを読まれたことにギグっとし、誤魔化すの

を止め本当に上へ通そうと詰所へと歩み寄る。

学園都市の最高権威者は、統括理事会理事長のアレイスター・クロウリーである。魔術師という一般公開されていない特殊能力を持った存在にも同名の人物がいるが、偽名あるいは同名と考えられている。が、実際には本人でありプランという謎めいた計画を推進していた。

彼の居城は、窓のないビルと呼ばれる建物であり内部に完全な自給自足を酸素供給すら行えるため窓一つさえ存在しないことからつけられている。

出入りは、テレポーター以外には出来ない。

その居城のなか生命維持曹のなかに浸っているアレイスターの元に外部からの通信が入ってくる。そのスイッチを入れ、「どうした？」と問いかける。

モニターに映っているのは、一応学園都市の幹部であるが中堅であるためにアレイスターとの面会がほとんどできない人物だった。その人物は、傍目にも分かるほど動揺していた。

「はい、それが学園都市に原石の超能力者を連れて来てから入れてほしいと入っている人物がいるとアンチスキルから通報が入りました。本来ならこのような要請は受け入れられないのですがその人物が両津勘吉といっています……」

「両津勘吉だと……！ 確かか？」

皆まで言わずアレイスターがその名前に反応する。

両津勘吉は、学園都市でもその名はしれわたっていた。警官でありながら大規模な経済事件を引き起こし、中には花見を日本全国で行うよう労働者を煽動し世界経済を一気に悪化させるといったことを

個人で行っている。経済事件以外にもノーベル賞を高度な技術を発明し取ったり、大規模な爆弾テロ事件を解決したりと良い意味でも悪い意味でも有名だ。

それだけでなく魔術師の世界でも有名だった。

「私はモニターを使って確認しましたが、確かなようです。両津は今まで暴力を使ってかなりの被害を大人数に与えたり米軍の知り合いを使ってミサイルを打ち込ませたりしているとの情報があるので、どうすればいいでしょうか？」

「それが確かならその人物を招かないほうが危険だ。その人物と超能力者という人物を入れ、研究機関の人間を迎えに出せ。それとおそらく金銭が目的だから、金銭を用意しておけ。額は任せる。」

「はい、分かりました。指示通りにします。」

そういつてモニターが暗くなる。

「両津勘吉か。万一あの噂が本当なら厄介だな。プランの修正をしておくべきか。」

アレイスターは両津勘吉を警戒しているが、それは魔術師の世界での噂が元だった。

魔術師の世界では両津勘吉という警官が態度が悪いために両津に制裁を下そうとした神や死亡した後に閻魔大王を倒し地獄を支配した拳げ句に復活したという噂が流れていた。これは、神霊が上位存在であるためガゼネタと思われるが大規模魔術や霊的エネルギーの痕跡から事実かもしれないという見方の魔術師もいる。

神霊といっても各宗教や神霊の固体ごとの差もあるが、これが事実なら下手に刺激すればどのような事態を招くかは分からなかった。

第3話 来訪（後書き）

アレイスターの話し方と対応の仕方がおかしかったのでしょうか？
応あれはネタです。

それと書いてあるのは爆弾テロ事件がこち亀のアニメ映画版でそれ
以外は全て本編です。

あつ、それとある魔術の禁書目録は本編開始以前です。

第4話 学園都市にて

「外から見ても凄かったけど中のほうがすごいね、両さん。」

日暮が感嘆した声で両津に話しかける。近未来的なビル群が眼下に広がり、時々ロボットが通る姿を見るのだから仕方ないだろう。

「確かに凄いな、ここは。」

両津は事前に調べているし今まで世界各国を訪れた経験があるがそれでも圧巻だった。

今両津と日暮は学園都市内に通され、研究所からの出迎えを待っていた。案内したアンチスキルの人間の話だと向かえが来るまで数十分はかかるそうだ。

両津と日暮は学園都市の景観に感動していたが、そうしていられない事態が起きてしまった。

この二人は一応警察官である。警察官であるなら当然犯罪者を逮捕する義務がある。

そんな二人の目の前を高校生から中学生と思われる少年と少女が走り過ぎていった。それも一方的に少女が少年に超能力によるものだろう電撃を浴びせながらだ。

「おい、日暮。暴行事件だ。行くぞ。」

「えー、あんな電撃浴びせる少女を捕まえなきゃいけないの。放つところよ。」

「馬鹿、そんなこと言ってる場合か。いざとなったらお前が超能力で取り押さえる。」

これを見た基本良い人？の両津としぶじぶだが日暮もあの少年と少女を追いかける。

「何で俺につきまとうんだよ、ビリビリ。」

その少年上条麻が疾駆しながら自身に電撃を浴びせる少女学園都市最強のレベル5の一角御坂美琴に向かって叫ぶ。

「いいから私と勝負しなさい。」

御坂美琴が少年に電撃を浴びせながら、少年の声など耳に入らないかのように少年を追いかける。

何故このような事態になったのか？話は少しさかのぼる。

御坂美琴は好戦的な性格の持ち主だ。学園都市内の最高レベルの自負のある御坂美琴はある日自身の電撃を浴びても能力がないレベル0の少年に防がれるという事態に直面してしまった。それが元で少年の迷惑を省みず追跡を出会ったばかりにおこなっているのだ。

この二人の追跡劇にいつもと変わる出来事が今日は起きた。

「待て、やめろ。やめないなら逮捕するぞ。」

そう野太い声で叫びながら、声の主の警官の制服を来た男が上条当麻と御坂美琴を遮る形でわってはいってきた。

「邪魔しないでよ。そいつと勝負するんだから。警官のコスプレなんかして恥ずかしくないの。」

御坂美琴はそれでもやめようとしめない。学園都市内に通常の警察はいないためコスプレとっているのだ。

「コスプレじゃなくて僕は本物だ。ほら、両津勘吉って書いてるだろ。」

コスプレと勘違いされていると言われた両津は相手を威圧するために警察手帳を取りだし見せる。

「本物！でも私はそいつと勝負しなくちゃならないの。ごめん。」

御坂美琴は本物の警官と知っても、悪人ではないのだが上条当麻との勝負にやりすぎてしまい電撃を浴びせてしまった。

無論相手を殺す規模ではないがそれでも相手を気絶させるには充分だったし、直撃していた。

だが警官は平然としていた。

「あんななんなのよ、電撃をくらって平気なんて。」

「僕は、あんなのより何千倍も強力な電撃を食らったこともあるんだ。あのくらい何ともない。それより今ならまだ見逃すが公務執行妨害も暴行罪だけでなく加えたいか！！」

「分かったわよ、やめれば良いんでしょ。それじゃ。」

御坂美琴は、電撃を浴びても倒れない両津の薄気味悪さや本物の警官のためその場を去ってしまった。

「助けてくれてありがとうございます。俺は上条当麻って言います。」

それを見た上条当麻は両津に礼を言う。

「良いつてことよ、それより日暮はどうしたんだ。」

「おゝい、両さん待つてよ。」

そこへ日暮が荒い息で喘ぎながら追い付いてきた。両津の俊足と四年間寝ていたせいで体力が少ないためだ。

「遅いぞ、日暮。何ちんたらやってるんだ。」

「だって両さん早いんだよ。」

両津と日暮が話し合っていると、そこへ白衣を来た男が近づいてきた。

「あなた方が両津さんと日暮さんですか？」

「そうだけどあんたは？」

「私は、研究所のものです。待ち合わせ場所にいなかったんですが、やはり警官だと目立ちますね。」

白衣からしてやはりと思ったが研究所の人間だったようだ。

「おい、日暮。この人についてくぞいな。」

両津と日暮は白衣の男の後ろについていった。

「ありがとございました。」

その後ろでは上条当麻がまたお礼を言っていた。

第4話 学園都市にて（後書き）

御坂美琴が悪人のように見えただしょうか？不快に思ったなら謝罪します。

両津は、一応原作で高圧電流を食らっても平気だったことや確か何かでエネルギー（ワンピース）を倒したことがあるので電流耐性があると思いました。

第5話 研究所にて（前書き）

今回は、両津と日暮が研究所についた話で、二話構成に分けるつもりです。

第5話 研究所にて

「ここが研究所か、さすがにハイテクの塊って感じだな。」

両津と日暮の二人は、研究員の案内によって研究所に案内されていた。両津が言ったとおり、研究所の内部はハイテク機器が満載されていた。コンピューター機器やモニターユニット、それ以外にも素人には用途の分からない研究機材が所狭しと並べられていた。もともと両津はハイテク機器が好きなのだ。

「まずは、この研究所の所長のところにお連れします。彼から説明があるはずです。私についてきてください。」

そう言いながら研究員が二人を先導する。その姿を追いながら二人は、かなり広大な敷地面積を持つ研究所の内部を進んでいく。研究員居によると着くまでにかなりかかるという所長室に向かう傍らその所々にガラス張りの窓があり、それを通して内部の研究を行っている様子が見えた。

何らかの分析機器なのだろう、青白い光を発しながら何かに当たって調べていたり薬品をラットに注入する姿を捉えられた。

「ここは、超能力研究だけじゃないのか？」

「この施設は、複合研究施設です。超能力研究だけではなく新素材の作成や薬理学などの生体にかかわる実験も行っています。それ以外にも多々ありますが。あ、そこ左を曲がってまっすぐ言ったら所長室です。」

研究員の案内によって数十分という時間を労したが、所長室の前へ

と到着する。

「ねえ、両さん、やっぱりやめにしない？」

日暮がこの研究所についてから始めて言葉を発する。彼は、害がないといわれても検査に対して不安を感じていたのだった。

「おいおい、ここまで来て言うなよ。それにこれは命令だぞ。」

「でも、……」

不安を感じた日暮が何か言いかけるが皆まで言い終わらないうちに、研究員が「所長、入ります。両津さんと日暮さんをお連れしました。」とノックをしながら扉を開ける。

「ほら、行くぞ日暮。」

そのまま日暮もなしくずしに所長室に入ってしまう。

「ようこそ、いらつしゃいました。わが研究所へ。お話は聞いております。私が研究所所長の内藤と言います。」

温厚な人柄と一目で分かるような笑顔で30代くらいの研究所所長が挨拶をする。だが、実は笑顔こそ浮かべているが実際にはこの二人を歓迎するつもりなどない。

この研究所でしなければならぬ研究は山ほどあるのだし、それをわざわざ学園都市外から来た信憑性の低い原石の能力者を相手にしなければならぬのだ。それだけでなく研究所にも金が必要だと言うのに超能力者でなかったとしても謝礼として何故か用意されてい

るかなりの額の金を払わなければならないのだ。
学園都市上層部の命令でもなければ、こんな仕事を本来はやりたくないのにいやいやながら滋賀って居るに過ぎない。」

「どうも、新葛飾署所属の両津勘吉です。よろしく。」

「どうも、日暮熟睡男です。はじめまして。」

所長の挨拶に両津と日暮の二人が挨拶をする。

「今日は、研究協力の為に原石の能力者をお連れしたそうですが、どういった能力を使用できるか説明して頂けませんか。」

「日暮が使えるのは、命中率が24時間内に有効な100%の未来予知能力でそれを使って犯人の逮捕にも成功している。未来予知といても物を探すことに特化してるよ。それ以外には、その予知の内容の念写と念力を使える。」

「そうですが、それは凄い。相当の高レベル能力者ですね。」

そう所長は、感心したように答える。内心では、実際はあきれ返っていた。信憑性が低いとは言え、ここまでとは思わなかった。デュアルスキルといって学園都市では、一人の能力者が複数の超能力を使えるものの総称をいうのだが、それらは実在しないと否定されている。詐欺行為を働くならその程度のことは、秘匿されてるといつても公開情報の中にあるのだ。詐欺を働くならそれを踏まえたいで行ってもらいたい。」

「間違いはありませんか、日暮さん。」

「はい、そうです。」

もう一人の気弱そうで頼りなげな男にも話しかけてみたが、動揺するそぶりはなかった。本当にデュアルスキルや原石の能力者とも思っているのか？

そんな思いは、おくびにも出さないで「それでは、具体的な能力をテストするために別フロアへ移動しましょうか。」と言いながら所長は、立ち上がる。

そんな思いは、真実を知ると同時に驚愕へ変わるのだった。

第5話 研究所にて（後書き）

次回は、日暮の超能力に対するテストです。うまくかけないかもしれませんが、よろしくお願いします。

あ、それと所長ですが場面的に名前を名乗らせてただけで活躍は特にありません。

第6話 研究所にて2（前書き）

とりあえず超能力に対するテストを一応行わせてみました。

第6話 研究所にて2

世間には、自称超能力者と呼ばれる人間がいる。それらは、超能力を持つていると自称し実際にはトリックを使うのが殆どだ。例えば世界的に有名なユーリ・ゲラーもまともな研究者の立ち会いでは能力行使を避けている。

だが、それらは学園都市ができてから駆逐されていた。それ以前にも超能力テストには厳しいものがあつたが、現実には超能力が自証されたのだから当然のことだ。

学園都市は、クロンブスの卵など能力に対する制御訓練も確立されており、能力に対するテストも厳しい。

両津と日暮が案内されたのもその超能力のテストを行うフロアだった。

そのフロアには、様々な部屋が並んでいてかなり頑強な印象を与える。これは、正確なテストを通信機器などを使って妨害されないために取られている措置だった。

「これから日暮さんには、この部屋の中にある透視能力者に対するテストを行う部屋に入ってもらいます。日暮さんの能力は、聞く限り予知で物の位置を把握することに特化しているためこれからその部屋に入ってテストを受けてもらいます。」

所長の内藤が部屋の機能を説明する。説明しながらこれでボロが出て金を渡さなければならぬのはいま이지만、開放されると考えていた。

「確かシステムスキャンというのを使って脳をスキャンするんじゃないか

ないのか？」

「原石の能力者に対しても無論行いますが、原石の能力は脳を調べても不明な点が多いので直接的な能力を見せてもらうのが主流です。さ、日暮さんあの部屋に入ってください。」

「はい、分かりました。これなら僕も安心できます。」

日暮が何らかの検査ではなく能力行使のため安心した様子でその部屋に入っていく。

「さあ、我々はモニタールームに行きましょう。」

両津は、数人の研究者とともに隣接したモニタールームにいたがテストを行う部屋を見て内心あきれていた。流石に自分の部屋ほどではないが、ただ単に散らかった部屋にしか見えなかった。

「こんなんで大丈夫なのか？もつと良い方法があるんじゃないのか？」

「乱雑な部屋にわざとすることですぐに把握できないようにしているんです。こうしておけば偶然発見されることもありません。日暮さん、その部屋の内部にはコインが数十個隠されてます、それをあなたの予知で探してください。」

両津に説明しながら途中から日暮にマイクを使って話した内藤によりテストがいよいよ始められた。そしてその結果はデタラメという内藤の予想を大きく裏切ることになる。

日暮は目をつぶったかと思うと、次から次へと部屋に隠されたコインをどこ隠されているか当てていった。それもタンスの間や座布団の下といったわかりやすいところではなく、ページ数を言いながら分厚い本の間から見つけたりリモコンの電池の収納ペースからもだ。遂には、全てのコインを発見してしまった。それも時間が数十分とかかっていない。

この精度の予知ならレベル4かそれより上になりそうだった。

内藤は、驚きを感じていた。今まではデタラメでしかないと考えていたのが目の前で事実であると証明されたのだ。

ひよっとするとデュアルスキルというのも本当かもと内藤の中で研究者魂が燃え始めていた。

そして予知にたいするテストを終えると次は、念力、学園都市での名称はテレキネシスに対するテストを行うことになった。学園都市では、超能力測定のテストのために御坂美琴がレールガンを発射したり高レベルのテレキネシスなら指定した重量の物体を動かすなどを能力行使を大規模に行わせているが、日暮に行ったのはそれとは違う。

今必要なのは、日暮の能力が本当かどうかを確かめることだ。そのために能力テストのため今では主流ではないが、テレキネシスに対するテストのために学園都市が出来る以前に行われていたサイコロの出目やサイコロを落とすときの落としたサイコロの角度を調節するというものを行わせていた。これは、ジョゼフ・バングス・ライオンという超心理学という呼び名で超能力研究がおこなわれていた際に彼が考案したためだ、

細工させるのを防ぐためにサイコロを器具から回転させて落とすという形で行われるが、それでも百発百中でこそ無いがかなり正確に出目を指定したものを出力していた。ただ、サイコロの角度は精密制御が不得手なのかうまくいっていなかったが、それでも十分凄いものは凄い。さらにテレキネシスの反応が学園都市で従来観測されているものとは違うことが詳細な分析はまだだが、観測されて分かった。

「どうだ、凄いか？凶悪犯の潜伏場所を百発百中で当ててるだけあるだろ。」

「凄いななんてものじゃありませんよ、この精度なら学園都市でも高レベルに達しますよ！！」

内藤がまさに感極まったといったふうと言った。

「まあ、これで事実だとわかったんだし、僕にはお礼を頼むよ。物質的なものじゃないと僕は、日暮を連れて帰るぞ。精神的な者は駄目だからな。」

両津が今まで我慢していたが遂に金儲けという牙を剥き出し始めた。この脅しでも駄目ならもつと効果のあるものを行うだけだ。超能力には、興味はあったがそれよりも金が好きなのだった。

「それでしたら所長室に謝礼を上層部が用意してますので今誰かにとらせてきます。」

「おう、頼むよ。」

両津と内藤がそれぞれ自分の目的を達成しようとしたとき、モニタ

―ルームに血相を変えた研究者が飛び込んできた。

「大変です、学園都市に侵入者が現れました！！門のアンチスキルを無力化して侵入しました！！」

「何だつて！！その侵入者の外見は？？」

内藤がその所員に問いかける。どうせアンチスキルが対処するので問題ないだろうが、責任者として聞いておく必要があった。

「それが初老の警察官の格好をしている男らしく、というより本当の警察官ではないかと……………」

それを聞いた両津の顔が一気に目に形で青ざめ、危険を感知する本能がレッドアラートをならしはじめた。

両津の知り合いには、というか上司にはそんな無茶な行動を取る人物がいたのだ。ひよっとすると学園都市にばれたために乗り込んできたのかも知れなかった。

こうしてはいられないと「農用事を思い出したので帰る。」と叫びながら誰にも捉えられないほどの速度でモニタールームを取り出した。

第6話 研究所にて2（後書き）

すいません、脳に対するテストなどを期待していた人には謝ります。アイデアをちよっと思いつかなかったのでこういう形にしました。追記したものは、現実に行われている超能力に対するテスト方法です。

今回は、両さんの天敵を登場させます。

第7話 発覚

中川と麗子の2人は、両津が去った後も派出所で勤務活動が続いていた。2人が大金持ちの人間だったとしても警察官の使命感は持っていた。

そんな中、中川のケータイの着メロが鳴り響いた。中川は、それに「もしもし」と何の危機感も感じずに出たが、直後に「中川か、非常事体が起こった！！今すぐ署に麗子と共に来てくれ！」と中川たちの上司であり両津の天敵である部長の怒声が鳴り響いた。

「ぶ、部長、何があつたか知りませんが声を落としてください。非常事態つて何があつたんですか？」

「電話で話せる内容じゃない、とにかく大変な事態なんだ。今すぐに来てほしい。」

そつといい残し部長は、ケータイを切った。何があつたのかは分からないが、部長の態度からして重大事件が発生したのかもしれない。

「麗子さん、部長から署に来るよう連絡が。非常事態みたいです。」

「ええ、分かつたわ圭ちゃん。」

2人は、自分達が所属している新葛飾署へと向かうが、新葛飾署はいつもと明らかに雰囲気違っていた。かなり騒然としていて、署員の落ち着きがなくなっていた。

「何があつたのかしらね。」

「分からない、多分本庁のほうから来てないから事件ではないと思

うけど。」

所轄の管内で大規模な事件が発生したらその指揮に本庁から応援が送られてきて本庁の指揮で実験に対処することになってくる。ただし、新葛飾署の場合は何故か将棋を元に犯人を逮捕する将棋デカだったり人間マージャンを行って犯人のマージャン好きを確保に利用する集団ばかりなのだが……

新葛飾署に入った2人だが、その騒然とした人ごみの中から2人に素早く二人を呼び出した大原大二郎部長と新葛飾署署長の屯田五目須警視が二人に近づいてきた。この2人は、今でこそ階級が違うがかつて何事件を共に追ったなどを経て今でも深い友情で結ばれていた。とはいえ、2人からは親しさなどが全く感じ取られなかった。それほどのものであるだろう。

「部長さん、これは何なんです？」

「うむ、実はな両津の大馬鹿者が寮母さんの通報で分かったんだが、日暮を連れ出したらいいんだ。」

「前に日暮が連れ出されて破壊活動を行ったことを聞かると、どんな事体が起こるか知れたものじゃない。今総力を挙げて日暮と両津を追っているところだ。何か手がかりを知らないか？」

部長と署長の二人がそれぞれ事体を説明した。日暮は前に起こされたことが有るのだが、四年に一度しか起きないためその結果として暴走を引き起こしかかなりの損害を人的被害こそ無かったが与えた過去を持っている。それを警戒しているのだ。

「あ、両ちゃん、ひよつとして！」

「もしかして、先輩……」

麗子と中川の2人がすぐ日暮を連れ出したと聞かされて両津の意図に思い当たるものがあつた。それは、学園都市についての会話だつた。

「何か知っているのか？何でもいい、話してくれ」

部長が鬼気迫る勢いで二人に迫つた。

「実は、……」

そして中川が学園都市について説明したこと、その中で原石という先天的超能力者がかなり貴重であることを話し、学園都市に向かつてたのではないかと話した。

「署長、学園都市に向かつて連れ戻しましょう。」

「しかし、それ以外の場所かもしれないし、それに学園都市は実質治外法権……」

「何をいつてるんですか、こうしてる間にも問題が起きるかもしれないんです。学園都市に向かう側と他の場所の搜索側へ分けて探しましょう。」

「分かった、向かおう。」

そして署長の命令一下、大量の警察車両が学園都市を目指し高速度で向かい始めた。

第8 暴走

学園都市の出入りを監視するアンチスキルは、今日不運にあっていた。そのアンチスキルは、両津と名乗る警官により脅されそれだけでなく逆らったら死ぬのではないかという圧迫感を味あわされていた。今までの人生でもあんな体験はないと思うほどだった。とはいえあの警官がここを通って帰っていくにしろもうあんなことは理由がない限りは起こらないだろうと考えていた。

だがその予想は裏切られ、今日彼を第二の不運が襲う異なる。

「ウワッ!!」

そう叫びながら慌てて彼は飛びすさった。彼の面前にあわやぶつか
る勢いで、大量のパトカーがとまったのだ、その中からわらわらと
大量の警官が降りてきて彼を取り押さえるかのように彼の周囲に広
がる。

「おい、両津の馬鹿は此处に来ていないか!!」

初老のいかめしい顔つきをした警官が怒鳴るように尋ねる。

「ヒッ!」

思わず恐怖に満ちた声を彼は、発していた。誰だって怒鳴られたら
萎縮するだろうがその相手が警官でかつあの男に勝るとも劣らない
迫力を出しているのならばなおさらだ。

「大原君、落ち着きなさい。そんなだと彼だって答えられないじ
やないか。私は、新葛飾署署長の屯田五目須というものだ。学園都

市に両津という警官がきてないかそれを知りたいだけなんだ。」

「その人でしたら、一時間ほど前にここを通っていきましたが、彼がどうしましたか？」

「両津は、正規の命令でここにきている訳ではない。奴は、金儲けが目的でここに来たんだろうがそんなことは放置しては置けない。それに同行していた日暮という人物も危険なんだ。どうか両津を捕まえるために我々を中に入れてくれないか。」

「どうやら脅すといい正規の命令にしたがっているわけではないと思っただが、そのとおりだったようだ。だが、どんな理由があっても通すわけにはいかない。」

「残念ですがそれは許可できません。後で彼がここを出て行くまで待つが、でなければ上層部と話を通す必要があります」

それを聞き、なぜか黄色の制服を着た警官が前に進み出てくる。「僕は、中川圭一、中川コンツェルツンの関係者でもあります。学園都市の会議に以前出席したこともあるので、そこを何とかできませんか？」

「そういわれてみると確かにテレビなどで見る中川コンツェルツンの関係者だ。だが、それでもだめなものはだめだ。」

「残念ですが、無理です。」

「仕方がありません。署長、いったん待ちましょう。」

「ああ、そうするか。」

おとなしく両津を待つことしかできないがために彼らは、両津を待

とうとした。だがその中に両津が出てくるのを待つことができないがいた。

ブチッと何かが裂ける様な音がしながら、「ふざけるな!!」と叫んだ部長が目にも止まらぬ速度で気づいた瞬間には学園都市に入っではだめだといったアンチスキルを投げ飛ばしていた。哀れ、投げ飛ばされたアンチスキルはそのままひびが入るほどの速度で学園都市を覆う壁に激突していた。

「大原君、やめさない。」

署長があわてて止めようとするが、こうなってしまうては部長は止まりはしない。両津自身に対して今まで沸騰していた怒りが両津がいると知ったがために噴出そうとしていた。

静止しようとした署長を完全に無視し、そのまま部長は学園都市へと通じるゲートの中に入っていた。それもさすがに両津の天敵だけあって老人には似合わないほどの速度でだ。

ゲート脇の詰め所に出てきた人間があわてて内部に侵入者が自分たちが対処するまもなく都市内に進入したと伝え、仲間の介抱のために出てくる。

「大原君、待ちなさい。」

「だめですよ、署長。署長まで入ったらますます大変な問題になります。とりあえず彼らを手伝いましょう。」

部長の行動に取り残された彼らは、アンチスキルを手伝うことになるのだった。

第8 暴走（後書き）

ストーリーの都合上と大原部長なら銃器を使って追い掛け回したこともあるのでキレて学園都市に突入という形にしました。
描写が下手ですいません。

第9話 侵入と邂逅

学園都市に両津に対する怒りから部長は、入っていつてしまった。普段は理性的な人物なのだがこと両津が絡んでしまうと両津にも匹敵する行動をとってしまうのだ。銃器を乱射したことやTVの前で取っ組み合いをしたことも両津に対して知識をひけらかされただけで問題行動をとっていないのに行ったことが度々ある。

学園都市の門近郊に位置する人々が驚くのを尻目にしながら部長は、高速度で学園都市内を走り続けていた。学園都市の知識など当然ないから、両津が何処にいるか分からないのだがそんなことも分からないほどに怒りを感じていた。

だが、そんな部長を監視するものがいた。幾ら常人を超えた能力を持っているといっても学園都市内は、徹底的に最新鋭のカメラと偵察衛星によって監視されているのだ。電子の目を何物も避けることはできない。

門の出入りを監視するアンチスキルからも情報が入っているのだから当然通報も入っている。それでもあまりの高速度からどこに向かっているのか割り出すのに時間がかかったが近郊のアンチスキルが侵入者捕縛のために急きょ向かっていった。

「止まれ、あなたは不法侵入を行っている。ただちにこちらの指示に従いなさい。」

バンから降り立ったアンチスキルが銃を構えながら部長に指示を飛ばす。いざという時は、実力行使も許可されていた。

そのアンチスキルは、致命的な誤りを犯していた。一つは、部長が怒りを覚えた際は誰の指示も効果が無いにも関わらず指示を下したこと。第二に部長が高速度で移動しているにも関わらず数十メートルしか距離をとっていなかったこと。

話しかけている間にも部長は、前進を続けアンチスキルの面前、銃器を使えない距離まで接近していた。アンチスキルは、恐慌をくだしていた。能力者でもない普通の人間が人体では絶対に出せない速度で目前へ迫っているのだ、恐怖を感じて当然だろう。一人一人、クモの子を散らすように包囲を崩し逃げていった。

そのまま前進を続けた部長は、バンへと激突したが、部長は無傷だった。変わりに傷がついたのは、あろう事かバンだった。部長と激突した際の衝撃で大破してしまったのだ。

その後も部長は前進を続け、「ですの。」が口癖のジャッジメントなど立ちふさがるものを倒しながら歩みを進めていた。

学園都市側は、混乱を続けていた。内部へ侵入者があつた以上は、テロ活動などを普通は想定するが侵入したのは警官で一人なのだ。テロ活動を目的にした場合は、少人数での侵入もあるかもしれないが一人で侵入してきたのだ。

学園都市側は、混乱していたために両津と日暮という人物の返還？を目的にしていることを知らなかった。そのためアンチスキルやジャッジメントを突破されたためにテロリストの侵入の可能性があるオレンジアラートという第2級の警戒体制を発動してしまうことになる。

上条当麻は、歩いていた。今まで付きまとわれていた御坂美琴に何故か学園都市にいた両津という警官に助けられたのだが、自宅に帰ってから生活費が足りないことに気づいたのだった。銀行に金をおろしにいた帰りだった。

御坂美琴とは幸い出会わなかったが、その彼を不幸が襲うことになる。

突然、けたたましい物々しさを感させるサイレンがなり始めた。

それと同時にケータイにメールが入ってくる。

そのメールは学園都市側が非常事態に出すメールだった。そのメールによると学園都市にテロリストが侵入した可能性があるオレンジアラートを示すものだった。外見と数にも記載があるが、それによると数は一人で警官の格好をしているらしい。

「警官か、まさか両津さんじゃないよな。」

頭に疑念がよぎったが、とにかく非難所に向かおうとした。それに自分は、不幸体質で不幸にあつてばかりなのだ。

まさかとは思うがテロリストに遭遇するなんてこともあるかもしれない。

非難所に向かおうとしたときだった――

「不幸だ――！」

そう上条は思わず叫んでいた。実際には不幸所ではないだろう。

そのまさかで上条のいた道にメールにあつた数と外見に一致した人物が、飛び込んだのだった。

周囲には誰もいない。このまま死ぬのだろうか？上条は思ったがそうはならなかった。

「おい、両津を知らないか？眉毛がくっついていて毛深い男だ。」
そう訪ねられたのだった。

第9話 侵入と邂逅（後書き）

とある魔術の禁書目録ファンの人ごめんなさい。この作品は、両津部長、日暮が問題を引き起こすという形でこち亀キャラが上という扱いです。

一応日暮戦で上条当麻は活躍させる予定です。

第10話 懲罰

「両津を知らないか？」

上条当麻は、その男から発せられた問いに混乱していた。今学園都市は、オレンジアラートという全域がテロリスト侵入の可能性ありという警戒態勢を取られていてその元凶が彼を助けてくれた人物の名を暴行を働くでもなく人質にするでもなくただ問いを発したのだった。

「どうなんだ、知らないか？学園としては言ったのはいいもののあの馬鹿がどこにいるか今更だがどこにいるか分からなくてな？」

「両津さんのことなら知ってます。だけど、両津さんは困ってる俺を助けてくれたんだ！学園都市に無理やり入った相手にただで教えるわけには行きません！理由を教えてください！」

ただ単に両津を探しているかもしれないが自分を助けてくれた恩人であることや侵入して入り込んできた相手なのだ。たとえ自分がどんな目にあつたとしても理由を教えてくれなければ、絶対に言わないつもりだった。

部長は、その少年の強い言葉に驚きながらも理由の説明を始めた。自分は両津の上司の大原大二郎という巡査部長であること、両津が今まで金儲けのためにいろいろとやっていること、そして両津が学園都市に金儲けのため独断で入り込んだために追ってきたということとを説明した。

「そんなことやってたんですがあの人……でもだからってやりすぎじゃないですか？」

「馬鹿もん、両津の馬鹿にはなんとしても思い知らせなければいけないんだ！それに両津は、危険な超能力者を連れ込んでいるんだ！」

「どういふことですか？！」

「両津が金儲けのために日暮という超能力者を連れ込んでいるんだ。」

それもこの町のような能力開発を受けた人間じゃないんで金儲けに繋がるとふんだんだろう。その男は以前キレテ警察でも鎮圧できないほどの事態を引き起こしたんだ。早くしなければどんなことになるか、それを思うと・・・」

「分かりました、その代わり俺も協力させてください。」

上条当麻は、両津に助けられたことがある。その行為を見れば両津は悪人ではないのかもしれないが、だからといってそんな危険なことを個人の欲望のためにやったのは許してはおけない。その幻想をぶち壊してやらないといけないと考えていた。

「両津さんは、研究者に案内されてどこかの研究所に向かいました。研究所が多くいる学区があるのでそこをしらみつぶしに探しましよう。」

「よし、分かった。協力感謝する。」

だが結果的にその必要は無かった。部長と上条が手を組んだ際に「げっ、部長！」という大声が当たりに響き渡ったのだった。声の主は、両津でこの通りに入ってきたところだった。学園都市外へ脱出しようとしたのだが、研究員に案内されてたどり着いたため場所が分からず迷っているうちに部長と偶然遭遇してしまったのだ。

それを見ると部長は、普段不良から逃げ回るなど長距離に自身のあの上条当麻でもとらえられないほどの速度で部長に向かって脱兎のごとく駆け出していた。それを見た両津も部長に怒られてはたまらないと、両津も逃走を開始した。その後を上条当麻がおいはじめた。

警報が発動されたために人っ子一人いない学園都市を疾駆する影が二ついた。当然部長と両津の二人である。常人離れしているだけあってその走りは並みの人間には捉えられないほどだが、それでも確実に部長と両津の差は縮まっていた。怒った部長は、両津が唯一恐れるだけはある。

そして遂に「両津、この馬鹿者が！！」と部長が両津の襟首を掴み

速えることに成功した。

「部長く、許してください。つい出来心で。」

「お前は、出来心が多すぎる。いいかお前はな……」

そしてそこでは部長の両津に対する説教が行われるのだった。

そんな時に上常当麻は、やっとの思いで追い付いてきた。この二人を追うのは、長距離に自信がある彼でも至難の技だったが、何とか視界から消えないことに成功していた。

そこで行われていたのは、部長が両津に説教をする姿だった。とはいえそれは、まるで一方的ないじめのようだった。

自分もそうだったとはいえさすがにみかめた上条は、「大原さん、それぐらいにしたらどうです？反省してるだろうし」て言った。

「こいつにはこれぐらいしないと意味がない。何度やっても反省した試しはないぞ。」

「でも日暮さんって人も危ないんですね？それならこんなことしてる場合じゃありませんよ。」

「確かにそうだな、両津日暮は何処なんだ？」

「それなら私と一緒に研究所に……」両津が答えようとした時だった。

周囲にまるで地鳴りのような轟音が響き渡った。何事かと思って辺りを見渡すと、もうもうと煙が空に広がっていた。

「あれは、研究所のあったほうじゃ。」

「両津、まさか日暮が暴れたんじゃないのか？こうしちゃおれん。」

両津の問題は解決した。だが日暮という全く別の問題が発生したのかもしれない……

第10話 懲罰（後書き）

やっぱり、その幻想はぶち壊すといったほうが良かったのでしょうか？
次回は、日暮が暴れる原因をかきます。

第11話 激怒（前書き）

更新遅れてすいません、PCの調子が悪いもので時間がかかってしまいました。

第11話 激怒

学園都市に侵入者が出たと知らされても研究所では、両津が消えた後も日暮に対する研究活動が続けられていた。侵入者といつてもたった一人でアンチスキルを相手に出来るなど映画などならともかくありえないし、何より日暮がデュアルスキルであるといった研究対象として非常に興味深い存在だからだった。

しかし、それは侵入者が部長だったためにオレンジアアラートが発動されてしまい、研究活動をさすがに第2級の警戒態勢では続けるわけには行かずにこの施設の人間も退避を進めていた。

「日暮さん、非常警戒態勢が発動されました。我々と一緒に退避してください。」
「そう告げているのは、内藤だ。そこは、先ほどとは違う別室だった。」

日暮が超能力を持っていることがテストによって分かった、全く別の脳の働きに対するテストを施すために移動するのは当然だった。

「分かったよ、僕も危険なことに巻き込まれたくないし。」

「それでテストですが、今回の事態が解決されてから継続して続けさせていただくとこちらとしては幸いです。ですので、今後もテストを行わせてください。」

「残念だけど、それは無理だね。警視庁との交流というのなら当然知らされているだろうけど、僕は四年に一度のオリンピックの年しか起きないから。だから、それはむり。4年たった後なら考えないでもいいけど。」

これが決定的な破局を引き起こすのだった。

「4年に一度起きるなんて笑えますね。おもしろいジョークです。でもそんな人いるわけないですし、オリンピックは来年ですよ。」
「えっ、今年じゃないの。」

「今は、2011年で2012年がオリンピックですよ。それにそもそも両津さんが教えてくれたんです。」

それをいい終えると同時にこの部屋の様子が変わった。怒気としかいいようのないがまるで大型爆弾が破裂するかのような勢いで怒気が渦巻き始めていた。そして一番の違いとして今まで寝ぼけているかのような日暮の顔が怒りのあまりに完全に別人というものに変化していた。

「あ、あの日暮さんどうしました。」

「ふざけるな、よくも僕を騙したな！両津め！」

日暮の怒声はその部屋に響き渡った。普段は温厚だが気に入らないことや、自分がたたき起こされてしまうと暴走してしまうのだ。

そう叫ぶと日暮は、手を組みあせるといった動作をした。何気ない動作だが、これは実際に相当の危機的状況に陥っていることを示していた。

そしてそのまま不可視の力、つまり日暮の念動力が放たれた。

その念動力は、内藤をぎりぎりでかすめ部屋の壁へ衝突した。それと同時に一撃で部屋の壁が粉碎され、周囲に破片が飛び散った。

これがもし人に当たっていたら破壊されていただろう。現代の兵器だったとしても壁を破壊するなど携帯する類いではそう易々とできはしない。

それだけの破壊を日暮は完全にやってのけたのだ。おそらく破壊力はレベルでいうなら4あるいは5かもしれない。

「何を怒っているか分かりませんが、落ち着いてください。」

この惨状を見た内藤が日暮を落ち着かせようと声をかけた。超能力を研究するものとしてこの男を放せばどんな被害になるか直感的に理解していた。とはいえその勇気は報われなかった。

ミシミシと嫌な音がすると、その部屋にあった椅子や机が原型をとどめないほど瞬時にして破壊されていた。内藤が声をかけたところで落ち着かせられるものではないのだ。

それを見た内藤は、危険を知らせるために壁だったところを使って飛び出していた。

日暮が暴走してからの研究所は変わり果てていた。以前は未来的な建物だったが、日暮が所構わず

不可視の力をもって襲ったことによって、壁が粉碎されてなくなり、建物が折れ曲がり構造がひしゃげ

、鉄骨が露出していた。

整然と並んでいた研究機材は破壊され、発火性の薬品のためなのか所々火災も発生していた。

幸いなのは、内藤の手によって研究員が無事に外へ逃げていたことだった。それでも大惨事には変わりはなかった。

その研究所の中を日暮がいまだに怒り冷めやらぬ顔で闊歩していた。「誰もいないのか、誰か出てこい！！誰もいないならこんな建物ぶっ壊してやる！！」

そう言うと言暮は、今までのような破壊をやめた。とはいえそれは更なる破壊の準備に過ぎない。

同系統能力者がいれば分かるだろうが、念動力が手の中に圧縮されていた。念動力を単純に発射するのではなく一点に集中した後周囲に爆発的なエネルギーを生み出そうとしているのだ。

そのエネルギーの奔流が放たれ、まるで嵐のように周囲に広がった。それは最初建物の強度を打ち負かせなかったが、徐々に建物の強度を打ち負かし始めていた。

そして遂に――

「全員無事だな。」

研究所の外では、避難した研究員達が全員揃っているかどうかを確かめていた。元々オレンジアライトのため避難準備を進めていたのが幸運に繋がっていた。

「よし、全員揃ってるな。急いでアンチスキルに連絡するんだ。」
そう言ったときだった。まるで土砂崩れのような音が周囲を賑わせ、衝撃波がダンスのように踊り狂ったのは！！

何が起こったのかと後ろを振り替えると研究所がバラバラになり瓦礫の塊へと変わっていた！

その惨状はおぞけを奮ったが、逆にこれで日暮も死んだのではないかと希望が頭にもたげた。

その希望を壊すかのようにコツコツと人の歩くような音が聞こえ、砂ぼこりの中に人影がシルエットとして見えていた。

「に、逃げる、逃げるんだ——！！」

それを見た誰かが叫び、研究員達は一斉に蜘蛛の子を散らすように逃げ出した。

後には、廃墟に経つ日暮が残されていた。

第11話 激怒（後書き）

日暮が強すぎだったでしょうか？どうせならと思い強化してみました。

第12話 日暮戦その1

普段はにぎやかなのだが、まるでゴーストタウンのように静まり返った学園都市内を両津、部長、上条の三人が疾走していた。何とか無尽蔵の体力を持っているのではないかと思われるスタミナに上条は何とか追いていった。

「両津さん、やっぱり先の爆発って日暮って人がやったんですか？」

「ああ、だろうな。」

今この三人が向かっているのは、日暮のいると思われる研究所の方向だった目的は、無論日暮の暴走を食い止めることにある。

「それも日暮をどこぞの馬鹿が連れ出したせいだ。」

こんな時でも部長は、両津への譴責、いやいやみをやめようとしな。だがそれは不安を誤魔化すめの物なのかもしれない。日暮の暴走は、両津と部長の二人係でも食い止められるのかは疑わしいのだ。

「部長、しっかりしてください。きちんと反省しています。こんな事態になるとは思わずつい出来心でやってしまったんです。」

両津が悲壮な覚悟をにじんだ声で言う。両津は悪い人間ではなく、日暮による大量破壊を目にして自分自身の行ってしまった行為に大して反省と痛感を覚えていた。だからこそ逃げずに向かっているのだ。

「それより、当麻お前は一般人なんだ。お前は速く安全なところに逃げろ。」

「でも、俺には幻想殺しって言う力が……」

上条は言いかけたが、その返事を待たずに両津と部長が速度を上げてしまい取り残されてしまった。

（確かに両津さんの言うとおりに逃げるべきかもしれない。けど・

・・・)

取り残された上条は一人悩んでいた。命の危険さえあるかもしれないのだ、ここは逃げるのが一般的だろうし、誰もそれを悪く言いはしないだろう。

だが彼は目の前で人が危険に向かって飛び込んでいくのを黙ってみていられるほど人間はできていない。むしろ自分も飛び込んで戦いたいという考えの持ち主だ。

(やっぱり、自分だけ逃げるわけにはいかねよ。あの二人が戦うつて言うなら俺も戦つてやる。)

そう戦いへ向けた覚悟を決めた上条は二人の後を無謀と思いながらも追い始めた。

第13話 日暮戦その2

「日暮、やめろ！」

「やめないか日暮！」

両津と部長の2人がそれぞれ日暮に向かって言い放つ。今日暮の破壊の現場についたところだ。

日暮は、研究施設を破壊するとその周囲をまるでゴジラのように暴れまわっていた。車両を念力によって吹き飛ばし爆発を起こし、道路を完全にコナゴナに破壊していた。

「両津、よくも騙したなあ！殺してやるう！」

そういいながら日暮は、両津とあるうことが無関係の部長に向けてまで念力を凄まじい勢いで放つ。両津と部長の2人は、目に見えない力のようなものを感じ取って2方向へ分かれて回避する。そして今まで立っていた道路が完全に陥没し分断されてしまった。

「悪かった、魔が差したんだよ。頼む、許してくれ。」

両津が日暮の怒りを抑えようと謝罪するが、この状態の日暮に言葉は通じない。そんなことお構い無しに念力で攻撃してくる。

「くそ、部長。説得は効かないようです。こうなったら実力行使を。」

「うぬ、やむを得ん。やるぞ両津。」

そういいながら両津と部長の2人は、それぞれ別方向から日暮に向けて攻撃しようと突進した。だが、両津と部長の2人でさえも日暮の念力の前に手も足も出ない。念力を回避し攻撃の隙をうかがうのがかろうじてだった。

この2人は圧倒的戦闘能力を持っているが、その戦闘能力は変動が激しい。両津なら命の機器や金だし、部長なら両津に対する怒りが戦闘能力の源泉といえる。それでも常人を超えた能力を持っているが、変動する能力であるために日暮の前では不利だった。

「部長！！」

両津の目の前で念力を部長が回避しきれずに電信柱に向けて念力で吹き飛ばされ叩きつけられてしまった。両津が部長の安否を気遣って部長に気を取られるが日暮はそんなことを気にはしない。

気をとられている内に両津も回避できないほどの距離まで念力が接近していた。くっここまでかと思念力の接近に気づいても回避できないために目を瞑り、覚悟するが幾ら待っても何も起きなかった。

恐る恐る目を開けてみるとその目の前には自分が助けた少年の背中が見えた。

「てめえのふざけた幻想をぶち壊してやるよ。」

そう少年―上条当麻は高らかに宣言した。

第十四話 日暮戦その3（前書き）

上条さんフィーバーです。

第十四話 日暮戦その3

学園都市で暴走した日暮。日暮の蹂躪を食い止めようとした部長は倒れ、両津さえも倒されようとしていた。

そんな時に希望が現れた。念力に襲われようとした両津の前に現れたのは、上条当麻だった。

その背中はいさいが今は頼もしく両津には感じられた。が、両津はそれでも止めなければならぬ。

自分達ならともかく肉体は別として子供を傷つけてたまるかと思う両津だった。

「やめろ、当麻。お前がかなう相手じゃない。」

「心配しないでください、両津さん。こんどはこっちがあんたを助ける番だ。」

俺の右手は、例えばそれが異能力なら神様のシステムだって打ち消せる！！」

怖いけれども力強い返事をする、そのまま上条は日暮目掛けて駆け出した。

その右手に宿るあらゆる異能力の力を打ち消す幻想殺しを唯一つの武器として。

日暮は混乱していた。自分の念力が唐突に消え去ってしまった、それが何なのかは分からないが暴走している頭でも危険なものであることは分かる。あの少年が原因なのだろうか？と考えるが考える間もなく少年はこちら目掛けて走り出てきた。

何なのかは分からないがその少年に向け連続して念力を発射する。それは恐怖のためでもあった。

だが連続して発射した念力さえも意味はなかった。正面に掲げた幻

想殺しによって。

その事態はますます日暮を驚愕させる。

（クッ、どうしたらいいんだ。このままじゃやられる。待てよ、念力で物体を動かしたらいいんじゃない。）

混乱した思考のなか破れかぶれで日暮は周囲のコンクリート壁を破壊し、その残骸を加速して発射する。

上条は順調に日暮目掛けて接近していたがその上条を危機が襲った。幻想殺しは異能の力を無効化できても異能の力で破壊された物体は破壊できない。

そして異能の力で加速された物体もだ。その点で日暮の読みは正しかった。

読み間違えたのはその少年の経験則だった。

そう加速した物体すら上条はまるで未来を見通すかのように迫り来る前に事前に回避していた。

（そんな直線的な攻撃に当たるか）

上条は、この都市に来てから持ち前の不幸体質によって強力な超能力を持つ能力者に絡まれたことが何度もある。それらの経験から未来予知に違い鋭敏な第六感と危険を察知する嗅覚を身に付けていた。その彼からすれば某銃弾を変幻自在にあやつるエスパーのような相手でもない限りは直線的な能力を使ってくる日暮の攻撃は回避しやすい。

いつの間にか日暮の前にたどり着いていた上条。

「ヒイッ。」

そのまま変な声をあげながら後ずさる日暮。日暮は、警官だが超能力を除けば戦闘能力は低い。自分の超能力の効かない相手を恐れていた。

ただキレただけで本格的な戦闘に対する覚悟を持たない日暮は

逃げるしかなかった。

「ごめん、悪かったよ。だから許して。」

日暮は謝って何とか身の危険を逃れようとするがそれで許しはしない。

「ごめんなさいだと。それで許されると思ってるのが!」

上条が日暮を怒鳴り付ける。その目には怒りが灯っていた。

「あんたは、確かに両津さんに騙されたかもしれない。けどどなあそのためにあんたのせいで酷い目に会わされた奴や迷惑を被る奴もいるんだよ。」

他人のことを考えずに自分の好き勝手に暴れていいと思ってんならその幻想をぶち壊す!!」

そう怒鳴ると上条は日暮を右手で宿りつけた。そのまま日暮は数メートル殴り飛ばされると気絶、いや気絶と同時に寝始めた。

本当に反省したからは知らないがこれで日暮の暴走は終わりを告げた。

第十四話 日暮戦その3（後書き）

後二話くらいで終わります。

第15話 終息

「やったぞ、両津。」

「よくやったな、当麻。」いつの間にか復活していた部長と両津がそれぞれ日暮の打破を喜ぶ。それに上条は笑顔で応えた。が、これで終わったわけでない。

「動くな、両手を上げ足を前に組め。」

そう周囲をアンチスキルの大群が包囲していたのだ。それも全員がバードスーツ駆動鎧に身を包み能力者用の装備を構えるというフル装備で。上空には六枚羽という戦闘ヘリも飛んでいる。

まるでルパン三世を逮捕しようとしているかのように。

研究者たちからアンチスキルへ通報が伝わりまた侵入者の姿を捉えたアンチスキルは雪辱を晴らすためと能力者用に特殊装備をして向かって来ていたのだった。

「部長逃げましょう。」

そのまま両津は逃げようとしたが、それを部長が押し止めた。

「待て、両津。思えば私も悪かった。お前も一緒に捕まれ。」

「そんな～～！！」

「不幸だ～～！！」

二者一様にこの事態を嘆いて叫んだが、そんな時も日暮は眠り続けていた。

こうして三人と一人は、アンチスキルの御用となったのだった。

エピソード

学園都市内外は、衝撃に包まれていた。学園都市は世界最強の技術力を持ち軍事においても最強に位置する実質的な独立国家であると認識されていた。だが、その都市内で壊滅的な打撃を受けていないものの情報は秘匿されて分からないものの三人の警官と一人の少年がコード・レッドという非常事態の発令や建築物破壊に関わっているというのだ。ばかばかしいと否定してしまえばそれまでだが、研究所や道路、車両の破壊が一面の真実があることを物語っていた。

そして今回の事件を引き起こした？両津、部長、上条、日暮の四人はというともう既に釈放されていた。上条当麻はアレイスター・クローリーのプラン遂行のために重要な手ごみであるため学園都市統括理事長の圧力と事件の鎮圧を行おうとしたために関わっている。両津、部長、日暮の三人は警視庁へその処罰を任せるといった形で警視庁に嚴重抗議したうえで釈放された。最もそれは表向きで実際には、この三人にもうこりこりな目に合わされていたからだ。両津は取調べ中だというのに悪くないといって強情だし、部長は尋問に協力的だが両津が一方的に悪いと自分の非を認めながら言い出したり、日暮については……いうまでもなく取調べできるわけが無い。取調べとこの三人に引き起こされた事態から早期に釈放が決定されていた。

この釈放には、両津の要素も大いにある。なぜなら両津に来てから学園都市内の帰趨を決せざるをえない不運な事態に巻き込まれていたからだ。学園都市内で人体実験に関わっていた人物がリスクを犯して告発しようとし成功しかけたり学園都市の重要技術データが電子ネットワークを介して流失しそうになったり学園都市のライセンス生産を企業側が取りやめようとしてきたり一方通行の絶対能

力進化実験の関連クローン施設が爆発したり・・・他にも様々な不幸なことがあった。

これは、両津の不幸体質が原因にあった。上条当麻と違い問答無用に不幸というわけではないが今までも生き抜いてきたが葛飾区のアイアンマラソンで大会が天候悪化で中止したのに嵐の中東京湾まで移動したり逃走中と言う番組で島に落雷が降り注ぐ中残された一人で太平洋を横断する羽目になったり、わざと犯罪行為を意図的に犯したこともあったがまともなしょうばいをやろうとしてウナギの卵と思ったものが蛇の卵で儲けを失い偽装がバレて逮捕されたり（何故かすぐ釈放された）といったことに起きている。上条当麻と違い、両津は周囲の人間でさえも天中殺に出会った日からなるといういわば広域型の不幸体質の人間でとばかりを魔術師であるためにすぐに気づいたアレイスターが学園都市外にほっぽりだしたのだった。もう来るなという気持ちで。

その後警視庁からこの三人は責任を取らされ、警視庁の陸の孤島と特命係がまだましと思える最果て書へと飛ばされたのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3790r/>

とある警官の学園都市訪問

2011年9月22日17時39分発行